

大東亜戦争従軍記

北満からインドネシアへ

吉田 喜一郎



昭和 14 年 6 月に、北条小学校にて徴兵検査を受け甲種合格であった。

昭和 15 年 1 月 9 日。

入隊の前日。

生まれ故郷、長尾村滝口の眼鏡橋前の広場に本郷、川下両区民の方々や親類の人達、数百名が数本の幟を立て、手に手に日の丸の小旗を振って盛大に見送ってくれる。

鈴木喜一郎、屋号本郷父宮、豊崎清、屋号本郷又助、浅沼喜一郎、屋号川下芝徳。

我々三名は父親に付き添われて館山駅までの車に乗る。見送りに来た母親は、車の中の私を見て涙を流している。

既に支那事変の最中のこととて、私の身の上を案じていたのだと思う。

親類の人達が武運長久を願って、自分の名前を書き入れた日の丸を貰って肩にかけ、寅歳の姉が縫ってくれた千人針（千人の女性が一枚の布に赤糸で一針ずつ刺して縫い玉をつくり、武運と無事を祈って出征兵士に贈ったもの。千人結び。）をしっかりと腰に巻く。

またこの千人針には、穴あきの五銭玉と十銭玉が縫い付けてある。これは死線（四銭）を越えることと、苦戦（九銭）を乗り越える意味がある。

館山駅で汽車に乗り両国駅で乗り換えて赤羽で下車、聯隊指定の宿舎に着く。

ここは、他の地域からの入隊者や付添の家族で満員であった。

夕食後、聯隊から下士官が来て明日の入隊行動について付添者に説明あり。

赤羽近衛工兵聯隊

昭和 15 年 1 月 10 日、現役兵として近衛工兵聯隊に入隊。

第二中隊兵舎に入り、着て行った私服衣類を全部脱いで三装の軍服に着替える。

着替えた私物衣類を外に待っている父に渡す。一緒に入隊した同級生豊崎清、浅沼喜一郎は別の兵舎に入る。

同日独立工兵第 24 聯隊第 2 中隊に入隊する。

新品一装用の軍服略帽に着替えて、私服を持って営庭に行き父親に渡す。

我々三人とも無事に入隊出来、付き添ってきた父親たちも安心して滝口に帰った。

昭和 15 年 1 月 15 日

近衛工兵聯隊第二中隊より、営庭内にある兵舎新設の独立工兵第 24 聯隊第二中隊に編入。同中隊には、運良く同級生豊崎清、浅沼喜一郎と一緒にいる。聯隊はもとより、中隊も班が同じとは珍しいことである。

初年兵教育。

野外訓練は、西新井大師や荒川土手の廻りなどの行軍。

指揮官は中隊長我孫子市出身、梅沢中尉、初年兵教官、沼部少尉、班長栗原丈太郎伍長各上官である。

渡満

昭和 15 年 1 月 23 日

渡満のため赤羽兵舎を出発し 18 時品川駅に着く。

プラットホームは、見送りの人達で一杯であった。班長の栗原丈太郎伍長は面倒をよく見てくれる。座席の窓を開けて左右を見ると、運良く父親と姉妹の顔が目に入り、大声で呼んで窓際に来てもらい、暫く話し合うことが出来た。肉親には今度いつの日に会えるかと、心淋しく思ったことを憶えている。

隣席には、同時入隊の豊崎清君もいて長旅の無聊を慰め合う。

翌日、広島に到着し市内に三泊する。

この折り、清君と二人宇品で撮った写真がアルバムに残っており懐かしさ一入である。

昭和 15 年 1 月 28 日

宇品港より始めて輸送船に乗り、玄界灘を越えて黄海を渡り大連港に着く。

昭和 15 年 1 月 31 日

大連港に上陸。

埠頭で、防寒服と貨車内使用の寝具用として渡された毛布二枚を持って貨物列車に乗る。広軌鉄道のため車内も広く、床も高粱こうりやんの殻を敷き並べ、シートを敷いてあった。軍装を解いて寛ぐ。

昭和 15 年 2 月 2 日。

関東州界通過。奉天を過ぎて北満州ハルビン哈爾濱を通過する頃は、暖房のない貨物列車内は寒さ身にしみてくる。

駅停車時間も長くなった頃、漸く目的地に着く。

昭和 15 年 2 月 6 日

朝、三江省樺川縣佳木斯チャムス駅に到着。

総員約八百名である。

満州第七七八部隊独立工兵第 24 聯隊について

聯隊長 永山大佐

第一中隊長 中村大尉

第二中隊長 梅沢中尉（我孫子出身）

第三中隊長 小島中尉

第二中隊初年兵教官 沼部少尉

第二中隊初年兵班長 栗原伍長

第二中隊初年兵班長 野条伍長 西崎

兵站部より渡された防寒服で身を固める。

工兵科大隊編成。新兵舎迄約四キロの道のりを行軍。

広い平地に民家や樹木なく、新設の煉瓦造りの建物あるのみ。初めての酷寒兵営生活であ

る。先発の二年兵達は、受け入れ態勢を整えるのが大変だったことであろう。

各内務班も決り各人のベッドも決る。

この時、ペチカと言う暖炉を初めて目にする。

外気温度零下三十度前後。

風速一メートルで、体感温度は一度下がるという。寒気を防ぐため窓や出入り口は総て二重作り。室内温度は昼夜を問わず二十度以上に保たれる。

ペチカの温度調節は、夜間の不寝番の任務で責任は重大である。

その構造は円形で、直径一メートルぐらい、高さ約二メートル。

外部は滑らかな白色の鉄材のようなもので包まれ、内部に耐火煉瓦を一杯に積んであって、中心の炉に絶えず石炭を燃やし、その熱が部屋を暖める。

従って、シャツ一枚でも丁度良い。

野外演習の時は、防寒外套、防寒帽、防寒ズボンに防寒靴、防寒手袋をつけ、出ているのは目だけである。

洗濯物もよく水切りをして室内で乾かす。一番困ったのは大小便所で、ここには暖房がなく凍りついて使用が困難になり、日曜ごとに皆で鶴嘴で砕いて、現地の人に肥料として使ってもらう。

室内の暖かさで屋根の雪が溶けて、軒先に二メートル近い氷柱^{つらら}が出来る。

兵営裏の二キロ幅の松花江^{スンガリー}は、結水すると二メートル厚さになり、鏡のように平らなところを戦車やトラックが走っている。

また、心得のある兵士たちは慰問品のスケート靴で滑って遊ぶが、私たちは滑れず転ぶばかりだが、厚い防寒帽や外套をつけているので痛いことはない。その後、少しずつ滑ることが出来るようになった。

夏季仕様の大型の貨物連絡船は、氷に閉じこめられると船体が傷むので、大勢で周囲の氷を砕かねばならない。

松花江が平常に戻るのは五月初旬である。

氷の割れる異様に大きな音が一晚中続いた翌朝、松花江を見ると二メートル近い厚さの氷が、回転しながら川一面に流れてくる。

そして次の日には、元通りの綺麗な川の流れに戻り、連絡船も通ることが出来るようになり、渡河演習が可能となる。

昭和 15 年 6 月～昭和 16 年 8 月 佳木斯

昭和 15 年 6 月、初年兵教育一斯の検閲終わる。

この間上等兵に昇進。

昭和 16 年 2 月 26 日。関東軍工兵下士官候補者教育を受ける為佳木斯出発。

15 年までは松戸の工兵学校で教育を行ったが、16 年より関東軍は独自教育との陸軍省より

の指令により、昭和 16 年 3 月 1 日^{ちちはる}齊齊哈爾^{ちちはる}関東軍工兵下士官候補者隊第一期生として入学。

24 聯隊候補者数 12 名、原隊より引率入学を命ぜられ任を果たす。

昭和 16 年 6 月 1 日、独立工兵 24 聯隊陸軍兵長に昇進。

昭和 16 年 7 月 24 日

佳木斯着。原隊復帰。

昭和 16 年 8 月 15 日 関東軍特別大演習

この夜、営庭は召集兵で満員状態になる。

当連隊人員も、現在員約八百名の倍の千六百人位である。

この日 20 時、故郷の知人浅沼喜一郎君が私のベッドに来て、営庭に召集兵が沢山来ていて、その中に同郷の人もいるから会いに行こうと誘われ、行ってみると坊田實、森田音吉など知人が多く驚く。

翌日、事務室でよく調べると次のようであった。

加藤陽輔（本郷新田、故人）

坊田實（旧姓早川、川下八幡から太平へ）

吉田音吉（旧姓森田川下惣八から平左衛門へ 故人）

小原力蔵（西横渚 ）

小原栄治郎（西横渚 こんきょ）

宇治原千松（小戸 故人）

長田康治（神余久所）

浅沼清（旧姓豊崎屋号又助から庄三郎へ 故人）

浅沼喜一郎（故人 本郷司馬徳）

昭和 16 年 12 月 8 日

大東亜戦争勃発

日本海軍、真珠湾を攻撃。

昭和 16 年 12 月 20 日

中支派遣のため佳木斯出発。

昭和 16 年 12 月 24 日満支国境山海関を通過。

昭和 16 年 12 月 26 日中華民国安徽省鳳陽県臨淮関、同日臨淮関^{ばんぷー}蚌埠^{わいが}着、淮河の渡河訓練

北満の佳木斯は松花江が結氷し、舟艇訓練架橋訓練等不可能のため、温暖地の河川に近い駅を選ぶ。

^{ばんぷー}蚌埠の淮河は、日本の関東地方と同じ程度の気温のため渡河訓練可能であった。

野外訓練には、一ヶ分隊程度入れる^{はっすいがた}八垂型天幕を使用する。

寝具の下に枯らした^{こうりゃん}高粱の殻を敷き起居。飲料水は、クリークより導入の水を洗浄、煮沸消毒して使用する。

食事は各中隊毎の炊事係りが作る。

渡河訓練は涯河のこの辺りでは川幅も一キロ以上あって、ベニヤ製の折り畳み式や、原隊より運送の舟、先形方形舟を繋いで船外機 15 馬力を取付けて行かう。

昭和 17 年 3 月 26 日

ばんぶーりんわいかん
蚌埠臨涯関

佳木斯も寒気が緩み始め、現在使用の器具機材大半と初年兵の入隊が近いため、18 時頃初年兵掛りと蚌埠演習ばんぶーの使用済みの機材、原隊復帰に宰領掛り各中隊とも臨涯関出発。明朝と昼の食事を兵站所に頼むよう言われている私達だけ国際列車に乗り換え発車。

目的駅につき停車。同行兵たちは椅子に仮眠していて呼んでも起きない。

列車発車したので、強く起して次の停車駅を待つ。然し急行列車のためいくつもの駅を通り過ぎ、漸く済南で止まり同行の兵士を下車させ帰りの列車を待つ。

貨物列車が来たので停車させて私は機関車に乗り、引き返して目的の駅で停車。皆を下車させ兵站所に行き明朝の食事を頼む。

兵站所員は遅い時刻のため不服そうだったが、詫びて協の仮眠所で休む。

昭和 17 年 3 月 27 日 17 時貨物列車天津駅着、22 時発車

二中隊の兵士が、時間があるので租界を見物したいと言い出したとの報告あり。未だ情勢が安定していないので、引き止めるように言いつけたが、これを聞き入れず四名がホームを出ていったという。

残った中野兵士と二名は、賑やかな貨物車と違い最後尾の車掌車に二人で乗り、夕食を済ませて一休みしていた。

一眠りしている時、列車の入れ替えをしていることが分かった。

時計を見ると出発時刻に近いのに、外出の兵も帰っていない。その時車外に出て驚いたことは、貨物車は一台もなく広いホームの片隅に我々の車掌車だけが一両ポツンとあるだけではないか。

寝ている兵をたたき起こした私は、停車場司令部に行き事情を聞くと、満州行の車掌車は天津で交換して発車するところだとのこと。

見ると、少し離れた場所に長い貨物車を引いた機関車が、盛んに黒煙を吐いていて啞然とした。

漸く外出の兵が走って来るのが見えた。この時は私も本気で怒った。

同年兵の岩村兵長に、取敢ず機関車に飛び乗り発車を待つように頼み、私は司令部に行き発車を猶予するように依頼した。兵士には各装具を毛布に包んで手近な車両に寄せ、今までいた車掌車を再点検して、機関車の岩村に合図して、列車を発進させることが出来たが、まさに危機一髪の出来事であった。

漸くのことで無事に佳木斯に帰還出来たが、これらは兵士の解放感による我が侬と同時に、

輸送司令官の指令不十分に依るものであろう。

3月28日 満支国境山海関 8時着

中支バンブーより原隊復帰の折り、山海関にて同行者中野猛君（青森出身）が、私より一歳年上の実兄とプラットホームで会って、話しあっていた。

出発まで四時間の余裕があるので下車して有名な万里の長城の始まるところ、『天下第一関』を案内してもらい、その額の掛る下の楼閣で皆で記念撮影をする。

榎本喜一二年兵、中屋敷文吉初年兵、斎藤隆同年兵、中野猛初年兵、岩村源三同年兵、中野の実兄の七名。

長い城壁の所々は崩れていた。支那事変直後の艦砲射撃のあととのことである。国境の道路に架る城門は立派なもので、流石に世界三大建築の一つだけのことはある。

（記念写真あり）

中野の実兄と分かれ帰満の途に就く。

昭和17年4月8日

三江省樺川県より佳木斯着原隊復帰

昭和17年7月1日

哈爾濱関東軍兵器学校に派遣

8月30日

教育終了。佳木斯原隊復帰

私たちは市内の日本人経営の北エスカヤ日の丸ホテルに宿泊して学校に通う。哈爾濱関東軍兵器学校に派遣中は、休日を利用して余裕を見て市内見学する。

哈爾濱のプラットホームで射殺された伊藤博文公の胸像は、駅のホームに安置されていた。

兵器学校の近くにはまた、日露戦争直前に軍事探偵で有名な岸大尉、横川少佐の碑を拝んだ。

その時耳に入った話では、二人は満服姿で任務についていたが、或る朝洗面の時に手を動かしていたところを怪しまれ、日本人であることが分かり、密告されて逮捕処刑されたとのことであった。

現地人は、顔のほうを動かすということである。

夏季は、佳木斯哈爾濱間の鉄道利用よりも、松花江の緩やかな流れを上下する貨客船に乗る方が楽しいものである。昔、アメリカの湖水を走るスクリューのない外輪船の話を聞いたが、ここでも同じ船が航行していて懐かしく思った。

昭和17年9月27日20時

陸軍機甲整備学校入学のため、同期生山梨県生まれの羽中田賢雄と二人佳木斯駅発。

昭和 17 年 9 月 28 日

鮮満国境^{ともん}図們通過、税関検査。所持品は戦友羽中田と軍衣の着替えと一緒に佳木斯で出発の時、野条さんより郷里の父親に渡して欲しいと託され、国境で税関吏に見られたら捨ててくれといわれた荷物であった。

中味は分からないが、少し大きな包みで、中支に行った折りに求めたもののようであった。

当時は段ボール箱などないので、薄板で私たち二人分と、野条さんの分を入れる最小限の箱を作って列車に運び入れて置いたが、駅に着く度に乗降の場所が変わり気が休むことがなかった。

図們税関に着くと税関吏が乗車して来て、内容の明細書を見せて欲しいと言われ、困ったことになったと思った時憲兵が入って来て、開ける必要はないと税関吏に言ってくれたので無事に済みホッとしたことであった。品物の中味は知らないが、野条さんによれば日本では非売品であるような話しをしていたことを覚えている。

元山より京城経由で釜山着は夕刻であった。

関釜連絡船は日中は飛行機に攻撃される恐れがあり、休航とのことで先着列車の人達が長蛇の列をなしていたが、この時も困った。

順番を待っているのはいつ乗船出来るか分からず、入学に間に合わなくなる恐れもあり心配で仕方なかったが、列の先端に連絡船のタラップの憲兵を見つけ、二人で軍隊手帳を見せて、状況を説明したところ快く乗せてもらうことが出来た。

この時は船首にいた赤帽が荷物を運び入れてくれ、我々はタラップで乗船した。

船室は乗船者で満員の状態だったが、夜中に出航して明け方に見えた岡が下関であった。

荷物とともに、東京行きの急行列車に乗る。

二人で荷物の箱に腰掛けたのだが、混雑した列車は停車の度に人の出入りが多く、気持ち良く眠るどころではなかった。

ようやく東京駅に着き、荷を下ろす。

昭和 17 年 10 月 1 日

佳木斯を発つ時は寒く、外套を着て乗車したのだが東京の人々はまだ半袖である。満州と東京では、このような温度差があることにあらためて驚く。

二人で荷物を持ち、省線電車で新宿に行き、駅にほど近い、入隊前に住んでいた淀橋の師匠の家に行き、大八車を借りて家まで運び入校の日時を確かめて、当日はこの場所から入校しようと約束して、ひとまず別れる。

昭和 17 年 10 月 1 日 17 時

着装以外の軍装などを師匠の家に置き、野条氏の荷物だけ持って両国駅発の終列車で館山に向かう。

館山駅からの白浜行バスはもうなく、千倉駅からなら白浜行バスの最終便に連絡するという

ことなので、千倉駅まで行く。

終着の白浜駅からは、四キロ余りの夜の砂利道を小銃を担ぎ、野条氏の荷物を持って歩く。表戸を叩くと父親が現われ、家の中では妹たちが「喜一、喜一」とびっくりしている声が聞こえる。

遠い満州から何の前触れもなく、夜中十一時に突然現われるのでは、驚くのが当たり前である。

西崎の野条氏の荷物に、住所を書いて父親に渡し、自転車で運んでもらった。

翌二日は、召集で私の聯隊に來た戦友の家に行き無事であることを伝えて廻る。

三日夕刻、隣村の父親の実家に行き、従兄遊田安次郎夫妻と遅くまで満州の話をする。

四日上京。

淀橋の師匠の家に約束通り羽中田戦友が來たので、世田谷の整備学校に行き、明日の入学の準備はどのようなを確認する。

学校には、我々二人の部屋やベッドも既に決っており、持参品を整頓したりして、今夜からでも宿泊出来るなどと話したことであった。

昭和 17 年 10 月 5 日

世田谷馬事公苑前 陸軍機甲整備学校

第五次下士官学生入学式

戦友羽中田賢雄と共に参列する。日本内地は勿論、満州や中国に駐在の機甲部隊の下士官も多く集まっていた。

我々二人は貨車班で貨物自動車の整備教育だった。班の人数は約三十名。

教官相沢少佐は実に懇切丁寧に教えてくれた。他には戦車班、牽引車班があった。

原隊には自動車操縦教育のコースがないので、参考にするため学校の庭に続く広いコースを暇を見ては書き写しておいた。

当時既にガソリンは不足がちで、整備学校で開発した「薪自動車」もあった。

この自動車は、白浜館山間の国鉄バスでも使っていたことを記憶している。

都内の新宿や銀座は、学生でも走ることが出来た。

相沢教官は、日本に一つしかない、金のかかった整備学校だから、しっかり勉強して原隊に帰ってくれと常々言っていた。

教材は車体もエンジンも、二つに切断して

内部の構造が分かるよう色分けしてあった。合同運転は、埼玉の秩父神社に参詣し市内で一拍。東松山、武蔵の百穴、熊谷より日光のいろは坂に似た坂を登り、秩父台地に着くというコースであった。

昭和 17 年 11 月

学生は、将校学生、下士官学生、軍曹曹長であった。

車種は、いすゞ扶桑ディーゼルエンジン、一類兵器トヨタ、ニッサン、シボレーV8
フォード、ニッサンキャブオーバー
二類兵器ガソリンエンジン

我々が扱ったのは、主にガソリンエンジンニッサンキャブオーバーであった。

教育指導

ガソリンエンジンやディーゼルエンジンの分解結合。戦場ではバッテリーの充電が不可能のため、必ずクランクハンドルで始動し、セルモーターは使わないこと。ハンドルは半回転で始動出来るように整備すること。部品の呼び方はカタカナ語を使わず、必ず日本語を使うようにとの教育、ギヤインボリュートは『歯車』など。

教官は白浜出身の世界的権威、成瀬政男工学博士の人柄なども話してくれたが、非常に厳しい教育であった。

12月1日陸軍軍曹に任ぜられる。

昭和18年1月3日

陸軍機甲整備学校在学中、正月休みで休暇を取り帰省。夕刻、帰省客で満員の館山行のバスに乗る。当時既にガソリンは不自由で、偶々そのバスは整備学校で考案した薪エンジンで、中山のトンネルにさしかかった折り、満員であることと未舗装のためにスリップして坂道を登れず、汽車の時刻も迫っており、車掌に提案して乗客の半数を下ろして、皆でトンネルの中ほどまで押し上げ、何とか両国行きの列車に乗ることが出来た。

昭和18年1月8日

陸軍初メ観兵式

代々木の原練兵場にて、整備学校の我々も参列。参加参列隊は近衛師団第一師団軍教育隊。

我々は運良く最前列に並ぶ。右の列は陸士の学生であった。

天皇旗を掲げる騎兵曹長の後ろを、白馬に騎乗する天皇陛下が行かれる。

「頭^{かしらみぎ}右！」の号令で挙手の礼をしながら陛下を拝することが出来た。後ろから供をするのは東条英機、杉山元、板垣征四郎、梅津美次郎の各大将閣下であった。

このような感激の名場面は、一生で後にも先にも一回だけであろう。

天皇陛下は観閲台に立たれ、近衛歩兵の軍旗を先頭に分列行進が始まる。戦車、牽引砲車の行進など、広い練兵場も参列者や参観者で満員であった。

昭和18年3月5日

陸軍機甲整備学校卒業、原隊復帰

同日20時、東京駅八重洲口乗り場より乗車。羽中田戦友も発車ギリギリに到着する。私の

身内は皆見送りに来て、父親は横浜まで同乗してくれる。

同 6 日、下関より関釜連絡船に乗船。

釜山 → 京城 → 元山 → 図们着。

昭和 18 年 3 月 8 日、鮮満国境図们税関にて所持品の検査あり。私たち二人とも異常なく通関。

昭和 18 年 3 月 10 日無事に佳木斯着原隊復帰。

昭和 18 年 4 月～11 月

自動貨車操縦整備の助教助手兵器掛りを命ぜらる。

当聯隊は、戦時編成のため未教育者が多かった。

東京の陸軍機甲整備学校で書き写して来たノートを見ながら、操縦コースを作る。

幸い工兵隊なので、聯隊脇の広い野原に私が線を引いて、東京の学校と同じコースを作ることが出来た。

土地が粘土質のため、良質のコースになったと思う。

昭和 18 年 12 月 1 日 編成下令

昭和 18 年 12 月 12 日

南方派遣部隊転用のため佳木斯発満州鉄道牡丹江通過

昭和 18 年 12 月 14 日

鮮満国境図们通過

昭和 18 年 12 月 17 日

釜山着同日釜山より輸送船に乗り門司港で船団を組む。

昭和 18 年 12 月 22 日

輸送船団門司港を出航。乗船は『能登丸』一万トン。

昭和 18 年 12 月 23 日

台湾高雄港着

段々と気温が高くなって来る。港は広く良港に見える。女性が、頭の簀に南国の果物を載せて船に売りに来る。

大きな船なので、他の聯隊の兵士の中に白浜の人達 2～3 人見つける。

昭和 18 年 12 月 25 日 高雄港発

昭和 18 年 12 月 28 日 比島マニラ港着

マニラ湾での船員の説明によれば、右舷に激戦のあったコレヒドール要塞、左舷の小高い山のジャングルがバターン半島とのこと。

埠頭に着いてみると、黄色いものが山のように積み上げられていたが、よく見るとザラメであった。流石は砂糖の本場と納得する。

昭和 18 年 12 月 30 日

佳木斯出発の際用意してあった臼で、正月用の餅を搗く。懐かしさ嬉しさは格別である。能登丸より上陸してマニラ城内に宿泊する。

昭和 18 年 12 月 31 日

朝、目覚めてカーテンを開き外を見ると、高さ四メートル太さ三十センチ程の柱が眼の前に立っていて、『高山右近戦没の碑』と筆太に書かれてあり、隣にタガログ語で彫刻してあり、織豊時代の摂津の大名でキリスト教徒故、徳川家康に追われて一族郎党を連れて比島に渡った故事を、泌々と思いだす。

昭和 19 年 1 月 1 日

ここからは小型の輸送船になり、島々の多いフィリピン諸島の航路に行く。何回となく爆沈された船の残骸を避けながら進む。

昭和 19 年 1 月 3 日

セブ島、セブ港で上陸。

市街も大分戦禍を被っているが、野戦郵便局があり助かる。

1 月 5 日

セブ港を出航

1 月 6 日

レイテ島オルモック着。港の設備貧弱のため大発動艇で接岸上陸する。高所に米軍の大きな兵舎があり全員宿泊可能。聯隊の編成を始める。

従来の独立工兵第 24 聯隊から船舶工兵第 14 聯隊となる。

船舶工兵第 14 聯隊附私任命

(独立工兵第 24 聯隊第 4 中隊主力第十二揚陸隊となる ビルマ作戦に参加のため)

2 月 10 日

第十二揚陸隊レイテ島オルモック発

3月8日

レイテ島オルモック発までの二ヶ月間滞在期間中、兵舎周囲の砂糖黍畑が放火され、夜半非常呼集で消火にあったこと再三あり、謀略であろうと思われた。

また、夜間に兵舎の周囲の衛兵で兵士を連れ、動哨で部落近くに行った折り、四メートルほどの木の枝がまるでイルミネーションのように輝いており、近づいてよく見ると蛍の大群であった。

地元では『蛍の木』と呼ぶとのこと。

兵舎内では夜間外出しないため、殆どの兵士はこれを知らないが、正に「君よ知るや南の国」で、感動すること頻りであった。

滞在中、オルモックより聯隊の役員と隊員の故郷への文通や、俸給受領の件で連絡船が時折着き、これに便乗してセブ島の野戦郵便局に行くことが出来、これは有難かった。

野戦場も広いようで狭い。佳木斯での編成替えで別れた戦友と郵便局で会うこともあった。

道路も、オルモックのような小さな村落も全部舗装されており、レイテの役所のあるタクロバンまでの長い距離でも同じことで、流石アメリカと思った。

昭和19年3月8日

レイテ島オルモック港発

3月10日

ハルマヘラ島着。上陸。

港は広い。濠北派遣軍の兵站基地がある。

敵前上陸用大小発動艇。ディーゼルエンジン。焼き玉エンジン。折疊舟、船外機各種基地。細部に再教育実地指導受ける。

3月30日

インドネシアのアンボン島アンボン港上陸

広島第5師団司令部駐留

海軍第七艦隊根拠地

昭和19年6月27日日まで市内宿泊

6月28日アンボン港発

6月30日濠北ケイ諸島トアール着

8月16日制空権制海権不備のためトアール発

8月18日ゴロン島沖でB 24 コンソリデーテッド四発重爆撃機と戦う。輸送船は『第五安芸津島丸』

甲板に休憩していた大勢の兵士が、遙か後方の爆音に気づき「友軍機だ友軍機だ」と叫んでいる。近づいて来たその形は、日本にはない大型の重爆撃機で、四発のボーイングB 24 コンソリデーテッドであった。

私は大声で「友軍機じゃない、敵さんだ」と叫び、「射撃用意」と号令したが輸送中の我々船舶工兵の武器は38式歩兵銃のみ。船首には迫撃砲が一基あったが砲手は見当たらず、B24はこちらの無防備を知っていて、低空飛行で二連装の機関砲座から身体半分乗り出して、甲板の我々を撃ってくる。

私は一番前に陣取って、「機首を狙え、銃座を撃て」と夢中で号令した。やがて低空飛行のまま一メートルほどの爆弾をばらばらと投下する。幸いなことに船には当たらず舷外に落ちて海中で爆発し、水柱が甲板に降り注ぐ。

相手の銃座は機首に一基、胴体左右に一基宛、後尾に一基ある。

夫々13ミリの二連装で、10発に一個の曳光弾が撃ち出され、鋭い光を放って飛んでくるのが実に恐ろしい。

こちらに対空砲火がないことをバカにして、百発ぐらいの低空飛行で襲いかかる。

三八式の歩兵銃は、口径は小さいが発射力は強く、近距離なら薄い鉄板程度は撃ち抜く力があるので、必死に撃ち続ける。

近くに、体調が勝れないということで携帯天幕で保養していた、青森県一戸生まれの佐藤福次郎上等兵があつと叫ぶ声が聞こえたので、敵機が去ったあと見に行くと顔中血まみれであった。

衛生兵を呼んで調べたが、鉄帽の正面皇章から弾丸が入り、なべ底を潜って外に出ており、頭蓋骨に異常なく熱で皮膚を焼いただけであった。

包帯を巻く手当てで程なく全治したが、弾痕の火傷でその部分が禿げた程度であった。

又、私の隣に普段は事務室で筆耕していた兵士、萩原兵長がいたが、膝射で右膝より向う脛に四ヶ所貫通し、上陸後陸軍病院に入院した。

敵の爆撃は一回で終わるかと思ったが、二回三回と旋回して低空爆撃を仕掛けてくる。四回目には、もうダメかと観念する。

ふと振り向くと、幹部候補生の或る大尉が甲板の重油で滑り、将校ズボンが油まみれになって、指揮も出来ずに蹲っているので「邪魔になるだけなので離れていて下さい」と叫んだ。

執拗な低空射撃に、死を覚悟しつつ号令をかけていたその時、敵機の機首から白煙が見えた途端、きびすを返すように飛び去って行った。

天運あつて兵も船も無傷と言って良く、遙か祖国を拝んだことであった。

敵機が去って、ブリッジや船室にいた兵士や乗員が前甲板に集まったが、安全になったこの時になって兵技下士官が船首の迫撃砲を射つ。

輸送指揮官の命令で、各自の発車弾数を調べると、忠実な兵士ばかりではなかったことが露見する。

撃ったふりをして、弾を海中に投げ捨てた兵士は幾人もいて、銃口を見れば撃たない場合は綺麗に光っておりすぐに分かる。

或いは船首櫓の碇チェーン倉に隠れ、難を逃れた卑怯な兵もいた。

工兵に渡す弾数は九十発と決っており確認すれば分かることだが、見なかったことにして、

輸送指揮官には真実を敢て報告しなかった。

対岸のゴロン島の発動艇は、干潮のため動けずにいたが満潮になってようやく浮上し、本船に接舷して全員上陸する。

二中隊の機関士で同窓生の森田音吉はこの発動艇に乗っており、我々の船が攻撃されるのを対岸より見ていた由。

満潮になり、全員乗船して出発。セラム島ピル行き。

昭和 19 年 9 月 21 日

セラム島ピル港 19 時～20 時

鈴木与利蔵中隊長に、アンボン港の海軍漁猟班で魚捕りの網を貰ってくるよう頼まれる。既に打ち合わせてあった、アンボン行きの三中隊の大発動艇のそばに行くと、参謀肩章を付けた将校が輪になっており、中央に中將の肩章の方がいらっしゃる。隣にいる将校に何方かと尋ねると「豊島閣下です。これからアンボンに行かれます。あなたも同乗していいですよ。」と言われ、実に嬉しかった。

但し、日中は敵機が危ないので夜間航海である。

埠頭脇の 14 聯隊の連絡所には、私の兵器掛りの助手をしていた柏出身の増谷兵長が居り、何かと有難かった。今夜はここに泊り、22 日海軍漁猟班に行き網を貰ってくる。

増谷と一緒に来た、日本語の上手なアリ少年を少し手許に置く。

これには後日談があり、昭和三十年、上京して文京区に住んで建築工事をしていた時のこと。

現場が恵比寿駅近くだった時、省線を降りて徒歩で行く途中、大きな敷地の門柱に『豊島房太郎』の表札が見え、私が知っている豊島閣下と同姓同名なので、建て主に聞いたところ、あの方は軍隊では偉い人だったとの返事に、間違いなく当時の司令官であったと思った。

昭和 19 年 8 月 21 日よりセラム島ハウマル半島カリマス村駐在。

昭和 19 年 10 月 食料確保のためジャングル開墾。船舶工兵 14 聯隊ジャングル内の仮設兵舎での野戦生活。

食料について

主食

米は僅かしか手に入らず、サツマイモとタピオカを主食とする。

ジャングルを開墾し、原住民に貰った薩摩芋苗を植える。

栽培法も、ナマコ型の畝にすることなど教えてもらう。熱帯地方のため成育も早く、どんどん大きくなる。

明日掘り取ろうと楽しみにしていると、夜の間野豚どもに喰い尽くされ、口惜しい思いを

したことも度々であった。

タピオカを取る芋、キャッサバは二メートルにもなる灌木で、ひまし油を取るヒマに似ている。この幹を五十センチほどの長さに切って開墾地に挿し木すると、忽ち根が生えその根が太って食用になる。

現地の人達の主食である。

余談だが、数年前のテレビ番組で、うどん粉を練る材料について、答弁者の高橋英樹さんが、それはタピオカの搗り身と一緒に一番美味しいと言うような答弁をしているのを聞いて、昭和二十年頃のインドネシアを一編に思い出した。

他にサゴ椰子の澱粉がある。

この椰子は原始林に多く生えているが、第五師団司令部より配分された区域で伐採し、小川の近くで澱粉の採取作業をする。

野菜類は椰子やソテツの芽、野草の芽などである。

塩分

ドラム缶を縦に二つ割りに切り、海岸に群生するマングローブの枝を燃料として、海水を煮詰めて食塩を作る。

この木は、不思議なことに切ったばかりの生のままで良く燃える。

甘味料

ソピー椰子（砂糖椰子）の甘味料を作ることを住民に教えてもらう。

椰子の花茎を花の際で切り、これに二メートルほどに切って間の節を抜いた竹をぶら下げておくと樹液が溜る。これをゆっくり煮詰めて砂糖の代りに使う。

樹液のままにしておくと発酵して酒になる。

この甘味料は、アジアの熱帯地方では砂糖と並んで普通に見られる甘味料である。

食用油

コブラ椰子（ココナッツ）の熟した実の内側に張り付いている、白い部分をこそげ落して煮ると、油分が浮くのでこれを使う。

この椰子油はまた、灯火用にも使う。

魚介類

海岸は遮蔽物がなく、人影を見れば上空から狙撃されるので、近くの川に行きマラリア予防に使う大きな蚊帳を利用して小魚を捕る。

岸辺の浅い川底に蚊帳を広げ、大勢で川の上流側下流側から水面を竹竿で叩いて追い込み、合図とともに引き揚げれば小魚が沢山入る。

ある時、川の中ほどにワニが四匹こちらに泳いで来るのを見つけ、慌てて岸にはい上がったことがあり、以後充分注意して作業するようになった。

後に、折畳み舟艇で上流の岸を点検に行った時、土手に五匹のワニが長々と寝そべっているところを見つけ、兵に小銃で撃たせて舷側に括り付け、仮設地に運んだこともあった。

ワニの肉は姿に似ず美味である。

食肉類

インドネシアの住民は殆どイスラム教徒で、宗教上の理由から角の生えていない動物は、食べれば悪魔になるといって絶対に食べない。

食べるものはヤギ、羊、野牛など。

従って、角のない動物即ち野豚は増える一方で、ジャングルの片隅に小広い場所があり、「野豚の溜まり場」といって、月夜の晩など二十〜三十頭が戯れている場面を見ることが出来る。

果物

南方なので、果物が沢山あると思っていたが殆どない。パパイヤ、マンゴー、ドリアン、バナナなどあるが極く僅かであった。

昭和 19 年 12 月 1 日

濠北派遣軍軍司令官陸軍中将豊島房太郎閣下より陸軍曹長任命の辞令あり。

防諜名濠北派輝第六一六二部隊、船舶工兵第十四聯隊鈴木喜一郎、山中秀一、羽中田賢雄、川崎慎一郎の四名。

昭和 20 年 5 月 14 日

船舶工兵十四聯隊

第一、二、三中隊の先発隊、ジャワ方面に出発。残留の各中隊員船舶第 20 聯隊第 4 中隊となる。

昭和 20 年 6 月 20 日

広島第五師団鯉兵団

アンボン島駐在の司令部よりの要請。兵団関係の食料不足し始めたので、船工^{せんこう}さんにセレベス島より輸送して欲しいとのこと。

鈴木与利蔵大尉、川口准尉、小生鈴木曹長下士官兵三十名。昼間輸送は空爆の恐れある為、夜間寄港の場所を大正十二年海軍水路部作製の海図や潮汐表を見ながら、アンボン島よりセラム島を過ぎスラ諸島スラペン島マンガレ島タリアブ島まで行く。

昭和 20 年 8 月 15 日終戦

スラ諸島タリアブ島で海岸線を偵察中敵機が低空飛行を始め、驚いて岸辺のマングローブ林に身を隠すが、攻撃はせずに窓から白いものを投げて飛び去った。

風に乗ってばらばらと漂う紙片を兵に拾いにやると、日本語で「日本政府はポツダム宣言を受け入れ、8 月 15 日に無条件降伏した。在外の将兵はいつか日本に帰ることが出来るから、身体を丈夫にして待っていなさい。」という内容であった。

「海ゆかば」の心、身を捨てる覚悟で過ごしてきたことから言えば、敗れたことは口惜しい

けれども、生きて肉親に会えるという実感が沸き上がり、心の底から嬉しかった。

昭和 20 年 8 月 20 日

隣の島にいる関根特務機関がセレベスに引き揚げるとのことで知り、同行させてくれるようにとの鈴木大尉の申請書を持って、柏出身の増谷兵長と、通訳をしてくれるアリ少年を連れて行く。

然し、あなた方は別行動をとるようにと断られて帰る。

関根機関より食糧貰って来る。

昭和 20 年 8 月 25 日 船舶工兵第 20 聯隊に転属

昭和 20 年 9 月 1 日

この頃、通信連絡が全然出来なくなり、アンボンまで約四百キロ近い海路を自力で脱出する他に道がなくなる。

現在いるところは戦前の郡役所で、隣の島にいる現郡長さんに手配を頼むと快く引き受けてくれた。そこで、インドネシアより小さい帆船二隻を借り入れ、住民四名ずつ雇って舵取りを頼む。

アンボンまで幾日掛るか分からないが、乗組員の食糧を集め、飲み水は煮沸して積み込む。隊長も准尉も関心を持たず、航海準備難しい。。

終戦までスラ諸島サナナに、海軍の連絡所があり軍人もいた。バシーバー島には憲兵もいた。

サナナ島は、県庁所在地で警察署もあった。

我々のマンガレ島には郡長さんがいて仲の良い関係であった

昭和 20 年 10 月 1 日

今はイスラム教と呼んでいるが、当時我々はマホメット教と言っていた。教えが厳しい日常生活である。

同所の住人が来て、隣の島に戦争で持ち主が不在になったポルトガル人の放牧場があるので、その牧場の牛を撃ちに行きたいとねだる。

鈴木隊長の許可を貰い、兵に銃を持たせ兵四人と現地人四人とアリ少年と私、全部で十人が船外機付きの折畳み舟に乗って出かける。着いてみると、大小の牛が百頭ほどノンビリと草を食んでいる。

兵に命じて大きな牛一頭撃ってその場で解体して良いところだけ取り、残り大部分は全部住民に渡す。

昭和 20 年 10 月 10 日

又行こうと誘われ、前回のように行ってみると、大きな牛たちが廻りを取り囲み、子牛を中に入れて警戒している。

兵が大きな牛を一頭撃ち倒したところ、廻りの大牛達が角を振り立てて、こちらに突進してきた。

不意をつかれて吃驚したが、身一つで傍らの木に登るように皆に叫び運良く登り終わった時、木の下にやって来て唸っている。

この時は困ったが、幸い牛の扱いに慣れた現地人が大声で叫んだところ、ようやく小山の方に引き返してくれて助かった。

急いで解体し、我々は少し取ってあとは住民に渡す。

10月20日の三回目の時は、エンジンの音を聞いたのか、我々が着いた時には小山の方に逃げて行って一頭も見えなかった。

昭和20年11月7日

朝、濠軍上陸する。

この時点で武装解除を行う。

全員の三八式歩兵銃と弾薬の総て及び軽機関銃1機を一ヶ所に集め、ランチで沖に行き海中に投げ捨てる。

濠軍同行の中国人通訳が、帯刀者は刀を提出するようにとのことを述べる。

私と鈴木大尉と川口准尉の三振りの日本刀を渡すと、丁寧に布に包み巡洋艦に持ち去った。

11月8日、セラム島への出発予定という前日の朝、海の方からエンジン音が聞こえてきた。アンボンよりの迎えかと海岸に出てみると、沖の方に巡洋艦らしき船と大型の機帆船が停泊しており、銃を持った大勢の兵士を乗せた二隻のランチがこちらに向かってくる。

これは敵さんだと大急ぎで宿舎に戻り、鈴木大尉以下各兵士に大声で知らせると同時に、武装解除した訳ではないけれども、絶対に銃は持つなと兵に命ずる。

間もなく、自動小銃を構えた彼らが宿舎に来る。

同行の通訳が濠軍だと説明するが、彼らは上半身裸で全員胸に刺青をしている。やくざの兵士だ。

私は各兵士の世話をしていた自分の服装を整える間もなかったが、部屋に三人入ってきて手当たり次第に持ち去る。

軍服、外被、軍靴、皮脚絆、腕時計、懐中時計（事務所にないので、私のものを使っていた）万年筆、海軍水路部調査の海図や潮汐表、地図、日誌など総て持っていった。

鈴木大尉は、中国の通訳を通じ話しをしている。

今までいなかった対岸のインドネシア人が大勢来て、意地悪された兵士を指差し、濠軍に言いつけると、前に引き出されて殴られている。これを大勢が見ているので、止めるようアリ少年に話させて漸く収まる。

今後の行動を聞かれ、アンボンに行きたい旨伝えると機帆船に乗るように指示される。

郡長さんと握手して別れる。

アリ少年は「曹長どのお元気で。」と涙を流す。

機帆船は、拿捕された日本船『笠木丸』で、巡洋艦に曳航されていた。

昭和 20 年 11 月 8 日

米の揚陸作業に兵士使役

濠軍兵士が着剣で揚陸作業を監視中、鈴木大尉が相棒の川口准尉を呼んで、セラムに行くとき米がないから、陸揚げ中の米をピンハネするように命令し、使役の兵士に船室に運ばせている。

船室に降りて、室内の米袋を見て驚いた。

「濠軍に見つかったらみんな首が飛ぶぞ。早く元の場所に戻せ。」と言うと、川口准尉は青くなって手を合わせ、何とか頼むと手を合せた。

私も仕方なく、監視の隙を見ては兵に返させ、無事に難を逃れることが出来た。

誠実な軍人ばかりいる訳ではない。

どんな方法でセラム島まで運ぶのか、将校という指導的立場にありながら、不可能なことをさせようとする。

こういうことは、過去にも度々あったことである。

昭和 20 年 11 月 9 日

セラム島ホーマル半島カリマス着。

アンボン港での作業を終わり、元のセラム島カリマスの仮設兵舎ニッパハウスに、三中隊の大発動艇で送ってもらって残留の兵たちと一緒にいる。

昭和 20 年 11 月～昭和 21 年 5 月まで

復員船到着までの衣食住

第五師団より配置された澱粉採取用サゴ椰子の自然林は、ホーマル半島カリマスの近くである。

元佳木斯の独立工兵 24 聯隊船舶工兵 14 聯隊は、更に船舶工兵 20 聯隊第 4 中隊となり、各小隊より作業員三十五名前後集め、配分された区域のサゴ椰子澱粉採りの宿舍作りを行う。ジャングルからビンロージュ、竹、ニッパ椰子の葉などの材料を集め建設する。

昭和 20 年 11 月 9 日

セラム島ホーマル半島カリマス村

昭和 20 年 12 月 15 日

船舶工兵第 20 聯隊 セラム島ホーマル半島に陸海軍集結。

昭和 21 年 1 月～

1 月 1 日。

空襲のない、久しぶりに穏やかさを実感出来る元日である。

衣食住は前述した戦中と同じ推移だが、少し変わったこともある。

武装解除で一時武器を持つことが出来なくなったが、耕作地に入り込んで食い荒らす野豚などの駆除用に、三八式歩兵銃を各中隊二丁宛所持することを濠軍より許される。

植えた甘藷が収穫間近になって、明日は掘り取りと言う夜に、野豚の群れに総て食い尽くされガッカリすることも相変わらずであった。

次の夜、野豚を撃ちに行き翌朝川岸でさばいていると、血の匂いに誘われて鰐が泳いで来るのが見え、驚いた兵たちは良い部分の肉だけ持って炊事場に逃げ帰ったこともあった。

また、第四中隊、森田音吉同窓生の小隊の射撃手が、ある日青い顔で山から帰ってきた。

訳を聞くと、とぐろを巻いている大きな錦蛇が、こちらに気づき鎌首を擡げて来たので、装填の五発全部を撃ち尽くして漸く仕留めた。ついては、これを運んで欲しいということであった。

十人程がロープ持参で行って引っ張ってきたが、その大きいこと。長さ十メートル、胴の太さは三十センチはあったろうか。

腹の中に、豚二匹を飲み込んでいたという兵の話であった。肉は皆で煮て食べていたが、皮は国に持ち帰って家内のハンドバッグに張ろうと言う者もいた。

昭和 21 年 1 月 5 日

前述したように、第五師団より配分されたホームル半島カリマス部落近くの小川のほとりで澱粉採取を行う。

船舶工兵第二十聯隊第四中隊の各小隊より参加の、四十名程の人員で作業をする。その中には同窓生、川下の森田音吉も入っていた。

戦争が終わり空襲の心配もなく、何より炊事の煙に気を遣わずに済むことなど、伸び伸びと作業ができるのは有難い。

宿泊所も出来上がり、現地の人に澱粉採取方法を懇切丁寧に実地指導してもらう。

幹の枝下六メートル、径五十センチぐらいのサゴ椰子の生え際の廻りに斧を入れると、このような大木がすんと倒れる。枝下を斧と鋸で切り落とし、中は白い澱粉だけなので、幹だけになった両側に斧を入れて、両方に開くと難なく割れる。

半分の幹側の中味を取り去って空にし、残り半分の幹を少し上げて、白い中味を良く砕いてから、小川の水を運び枝の部分の皮を網にして漉すと真っ白い水になり、下の半分の幹に溜めるとすぐに沈殿する。

これをニッパ椰子の葉で作った入れ物に貯蔵しておく、各小隊から貰いに来る。各小隊長も見学に来る。

熱いお湯を注ぐと葛湯になり、餓えを凌ぐ大切な食糧になる。

子どもの頃風邪を引くと、母親が作ってくれたことを思い出す。

作業場の近くに高い木があり、朝早くからオウムが集まっていて、当番が「起床！、起床！」と叫ぶのを覚え、二十羽以上が正確に真似をする。兵がミスをして上官から注意されると、ゲラゲラと笑っているような鳴き方をする。

その隣の大きな枝には、犬かネコほどの大きさの^{なまけもの}樹懶が四つ足を組んでぶら下がっていて、悪戯をして木を揺らしても逃げたりせず、実におっとりしている。

毎朝宿舎前に整列して、今日も無事であるように祈る気持ちで点呼を取るのが日課だが、ある時二、三日続けて遅れて来る兵がいた。

不審に思い、翌朝それとなく跡をつけてみると、宿舎裏の少し離れた草むらに大きな木が茂っており、草むらをかき回しては何かを拾って口に入れている。

よく見ると、その木は鈴なりのマンゴーであった。

帰ってきた私は朝食の時に、マンゴーが沢山あるが未熟なので、皆で取りに行って炊事場のかまどの上で追熟させようと言った。

同郷の森田音吉が木登りがうまかったことから、鋸を腰に差して木に登り枝を落すと、下にいる兵たちが拾い集め、米袋一〇個ほどに入れて炊事場に運び込み、炊事場の焚き口の上に棚を作って乗せて熟すのを待った。

幾日か過ぎて色づいてきたところを、棚から下ろし皆で食べる。

その香りと甘さは南国の味そのものであった。

病気では、怖いものにマラリアがある。

蚊に刺されないように、夜は大きな蚊帳の中にいるようにするが、これに罹ると四〇～四三度も熱が上がり、毛布を掛けた上から兵士が二～三人で押さえつけていても、がたがた震えが来て止まらない。予防薬キニーネを毎日医務室から渡されるが、住民もこれを欲しがるので、バナナと交換したりする不心得者がいて困る。

このような兵が罹患しやすく、野戦病院送りになって、遂には復員後も後遺症に悩まされることになる。

アメーバ赤痢に罹ると、一日に三〇～四〇回も便所に通うことになり、死亡することもある。

昭和 21 年 5 月 30 日復員船到着

米国輸送船、セラム島アリアテ港着

5 月 20 日頃より、アリアテの海岸の芝生に八錘形のテントを張り生活する。

6 月 2 日

乗船当日は、早朝より各個人の所持品以外総て焼却処分する。これを見ている住民から、勿体ないなあという声が聞こえる。

残務整理が総て終わり、乗船に先立ち所持品と身体検査を行う。

本船が横付け出来る港でないため、本船は沖に停泊しており、米軍のランチに分乗して復員船に乗り移る。

甲板の手摺りから数条の縄梯子が下りているが、波があるため縄梯子が着いたり離れたりする上、手製のリュックサックを背にしているため、登るのに必死である。

「ここで落ちたら日本に帰れないぞー」と励ましながら全員無事に乗船する。

然し、「憲兵と特務機関員は下船して下さい。」と言われるなど、難しいこともある復員であった。

広い船室は満員状態で、熱帯であることもあって蒸し暑いことこの上ない。飲み水は一人一日一リットル。

6月12日 名古屋港に上陸

埠頭脇の三菱倉庫の大きな建物に入る。

復員業務の各事務所あり。

入浴後、医療機関で体力検査などがあって、全員がここで一泊する。

復員完結 予備役編入 除隊

上記の通り相違ないことを証明す

船舶工兵第20聯隊長 陸軍少佐 平島三樹

6月13日

各人、名古屋発東京行きに乗車するが、満員で座席なし。同郷の知人森田音吉と乗降口近くの床にリュックを置いて腰を下ろすが、駅に着く度に移動させられるのが厄介である。

関特演（関東軍特別大演習）以来の戦友は皆一緒に乗車して、こうして皆元気に帰還出来ることはこの上なく有難い。

6月14日

両国駅から館山行の列車に乗る。

駅毎に、生死を共にしてきた仲間が降りて行く。みんな元気でなと手を振って別れる。館山駅からは、ガソリンではなく薪で走る、而もトラックであった。

生きて再び踏むことはあるまいと、心に決めていた山河。夢に出てくる家族の顔に再び会えるとの思いと、トラックの荷台から見える懐かしい川や民家や田畑の姿に、『国破れて山河あり』の言葉を思い出し思わず涙が落ちる。

長尾橋で下車し、森田音吉と二人で坂を登り長尾村役場に立ちより、森田村長さんに帰国の挨拶をし、音吉と分かれ懐かしい我が家に着く。

祖母、両親、甥、姉妹と、家族皆元気な顔で待っていてくれた。

支那事変以来大東亜戦と長い戦場生活での波乱万丈の中にあって、大正生まれの我々には、

所謂青春時代というものはなかった。

また、生還した己を省みる時、如何に細心の配慮を怠らずとも、人の運命が自分の計らいだけでは、どうにもならぬものであることをしみじみと思う。

フィリピン到着がもう少し遅ければ、全滅もあった筈であるし、輸送船第五安芸津島丸で、米軍機に攻撃された時、若し投下した爆弾が命中していればなど、生死を分けるのは正に紙一重で、人知を超えた何物かを実感せずにおれない。

平成 19 年 2 月 19 日

電子書類化作業環境

コンピュータ	Apple 社 Power PC G5 2GHz OS Mac OS X 10.4.8
ワープロソフト	egword Universal
画像ソフト	PhotoshopElementV4
プリンタ	EPSON PX-G5100

作成者 紫雲寺住職 高橋龍渉

お読み戴き、有り難うございました。

筆者の吉田喜一郎さんは、今年 1 月 21 日にお亡くなりになりました。

91 歳でした。

長く入院中の奥様を、便数の少なくなったバスを乗り継いで、殆ど毎日見舞いに行くという家族思いの強い方でした。

慎んでご冥福をお祈り申し上げます。

平成 22 (2010) 年 3 月 5 日

高橋 龍渉